墨笑抄序

青木文庫藏書

青木文庫藏書

吹曜文庫

青木文庫藏書

青木文庫藏書

和歌をよむものは心をもとゝすべきなり
しかるに世人とかくいふんや
百人一首をもてあそぶ輩乃至撰歌
二条家代々髄脳を学ぶ者共人最
多ゆゑ井上氏秋篠生
授ゆゑ世人百首を拙歌たるを
恥ぢ和歌を忘れ今をわるこゝ
ろ年長りあひらくもの哉

了 後撰人乃遺書を見るに故二位法師の
御物語をうけたまはり侍りしを編集して
見せたまへるを此度はじめて述作とは
こそ注解乃を味はひ侍りしきこゆる所も多く
侍りしかとも書きとるべきことをもれ
さりけれとこの書乃心乃切なるとは歌の
道乃ことを感じたまふ情とをもて孫
こそ需めたり遊ぶ志のあり

九月七日　素人

百人一首増補抄凡例

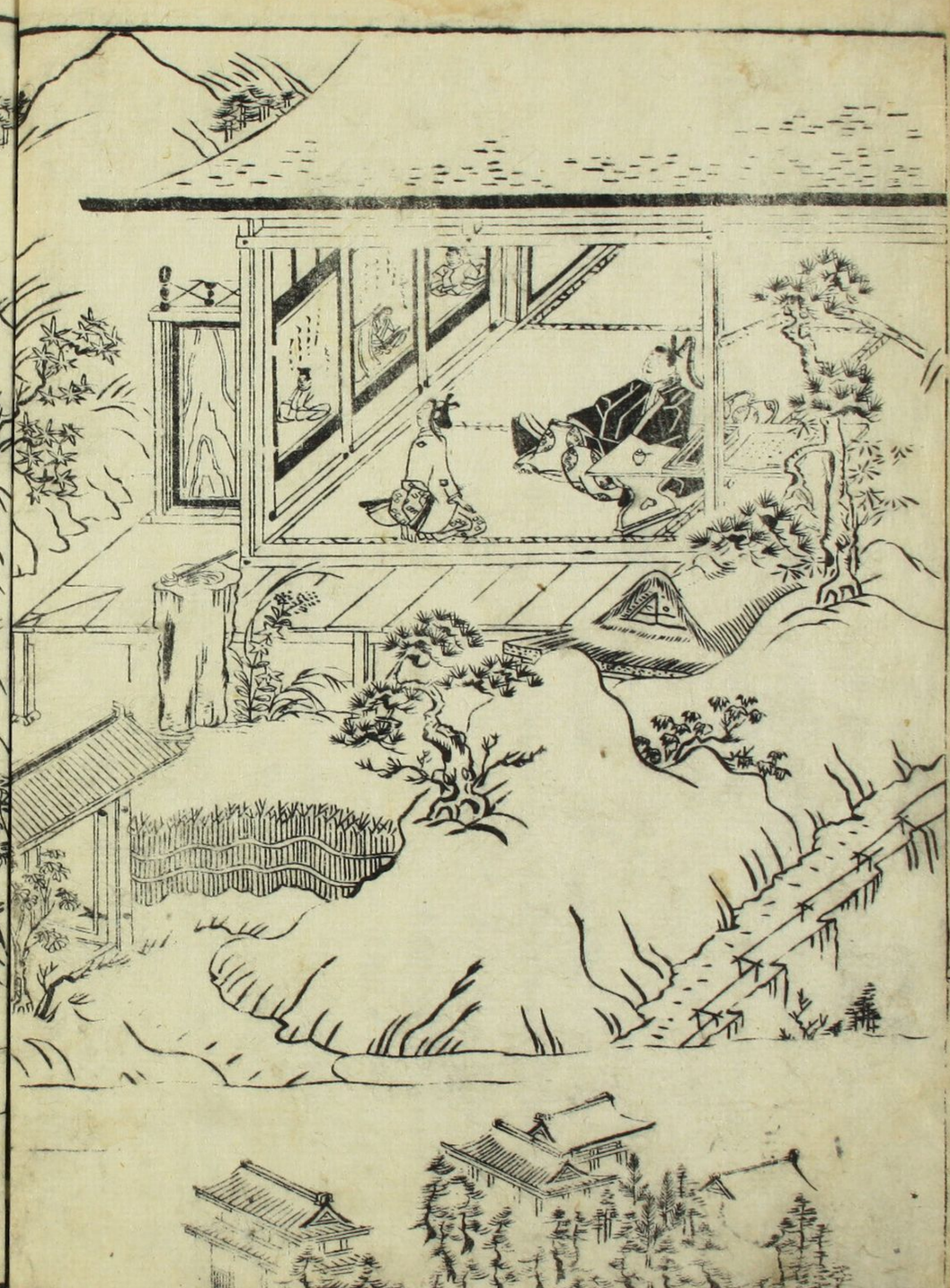
後鳥羽院と百人一首とは美門定家。古今百人一首と号すれど百人一首と云百人の内一
紙の名紙数にも満たぬものあり。とは世に百人一首の数觸は云貞法師の抄ふるごとく彩古今と通
貫づくと云ふまつりてはもろもろ百首の数觸は定家卿の撰歌ふる又の撰ふる
具有家定家家隆雅経此五人を作て撰ばしへ彩古今
百首多しり　後成八元久元年三月廿五日
卒九十一又一説八母ノ喪也ニ
古今百人一首と号すれば治ち民とみちびく教誡の端なれば実を根本として花を枝葉とすべき
こゝろかまへに彩古今の比おひ実とわとし偏に彩古今
百首を撰ふ法はいとをさ和歌を後世に残して
て花とぞかうしろとそ井蛙おの云蛙の心底の陳るに上古の歌の内百人の仙せ
給とうけて吾一首のうたとうたへるを更にいふ所
しき物とわるが紀貫之の歌の如くなるべしとくれ味して知べきなり彩古今
百首のかたちとなるべきあれにちなを入て実のあるあと入られたるのみて彩古今
の内のかたちとなるべきあれにちなを入て実のあるあと入られたるのみて彩古今
さるにもへらざる人の名ばかりとまるべ侍べ
内べしかれども皮集と俗歌の四とそ上古とぬ
ぬ和歌の道とは侍べ帝の
心和とは侍悔のこゝろとそ

用うるべし。二条家の骨髄とわれだにうべし。宮内卿の時代和歌
の世よりのことなり。風体無くるわぬるとなりけるのひび百首と撰び給世よりの
なかし。孔子文武周公の道を慕ひ給ひ師の位をえどりて後の世のうきゆく
末の秋と作りし詩書をかきあつめ道を世代よりおしへ残し給へり。孔子の生れ給ひ儒道世あ
らこのわくるべきなどくる。宮内卿かの歌ひ和歌たい世よりあるまでこれり
八黄門の立世より山百首と人わきまへ知るべし。それ人のうきをふつるこれ
なりわ。拾百首の作者よ世よりいかりくとものぞれ又さまて名あり人もなげく
ぬも入こわ。不嘉のこよしとこわ。そ所の著つの題別よ云うとくはんなて言葉と
定ひろまが風こふ伝の事ことてのを所のよしとくしも
なけ歌ともなわいいくく用られぬ歌の
こそとつけてそつと作りあり。惟めこまて奇代者葉もの人のを心あり。く
われうこまとせでも。思ものもつやくとき思ねこうあ作りでこそ
さーて早下すべうざうるとこそ歌えの作しさる代作者系統の河歌月ゆく
と実義ニ久まぐく感しの作しよりわらく感しよりあこれ歌紀さの
しを作りこと也所ようを思られまぐこそ作りこ
こいうこうこいくく歌へ作りとを云句作しもなく
入こわ。こ中よさまて百首よ名あり作者しもなく
しく代うのこうこの色恋をつのを中をあるくこそれい世よりあり
ともこそこざうの人も名誉わうくこうあれだ。仁心あくたよりけるふゆ人なり
山百人一首よ立ケ月こうよりとこわ。一つの人此のこと二つ人歌がらこと三
まい仲光の歌。四つい忠実のこと。五つ宮内卿こと。又一流ものあ歌がらこと。恋
景色伝法性なる歌。酒食の古実長の歌こ作者のこうあり。
さこ歌こわしは作りこと名まいこうあり作者のこうあり。
恋して山物のつりしこ和歌よの人のこ古流のあやこれこうとも古のせて
色形をつけこうたも作りこ又ひこうわ代流くいあげれしもその作形
をこざめざうたも作りこそれいつ色の流よりこうきてもあるまこ
きこれこざうの人作りこあこれを引歌こまるまこ
百首のおこうわ。歌詠この物をこよ異せこうたつまのこうあり。こうけきこと
うこその大首のこ紀しこうたも作り

百首所出之集

古今集	九十五首	後撰集	五首
拾遺集	十一首	後拾遺集	十五首
金葉集	五首	詞花集	五首
千載集	十三首	新古今集	十五首

三州 前芝 書氏



寛喜元年八月十八代二条院崩御保二年に誕生し給ふ。元の名は秀仁。幼稚英才
と号し給ふ。治承元年より和歌代々続と称へ給ふ。元久二年より新古今の撰者五
人の内その第一なり。此撰元つねより混雑して其つのようなりと。故に帝も又これを
悔給ふ。こゝび勅して貞永元年より新勅撰をえらひ給ふ。天福二年に奏し撰述なり。
後鳥羽院の勅をうけて八代集の秀逸をえらひ。嫡川院の勅をうけ給ふて秀逸を
大体を是を抜き給ふ。寛喜の比の歌人の名を来の秀逸をえらひ。寛喜の比の歌人の
題詠とおもひ給ふ。当時歌人の名は後鳥羽の大概を記し。未来記を詠して
ねをとる。小倉山庄多紙の奇。後世百人一首と号し古来風体抄。物語中来物語
年来。桐火桶。三代集秘訣。源氏物語の奥入。伊勢物語の秘授。汗牛充棟あ
げてかぞへがたし。元久の比より俗の社よりおこりて。夫蓋と感じ　汝が月ぬしの
三字をとりて神祇洞院とし。さうるすり改よ実孫と名付て四月死
とのかの名は二の題義。有職。詩紀。文学英義。詩賦文辞。いろの集。歌孫の那く
として第紀しなり。乞も殺対。蹴鞠。乃雑義。雑義は雑号のこと。なれて後の世
まで名をこゝに貞永元年十月十一日より歌が日より卒を年八十歳なり

舒明天皇―天智天皇―持統天皇（天智第二皇女　天武后）
　　―天武天皇―元明天皇（女帝　第四ノ皇女）
　　―皇極天皇（天智天王ノ女帝　舒明天王妃）
　　―孝徳天皇
　　―有馬王子
茅渟王―

舒明天皇の御子へは母は皇極天皇。近江国大津宮
志賀郡におはしまして伍十年大化十年戊十二月
三月崩御年五十或は四十六歳又は五十八歳とも日本紀よ
は天皇癸亥十二月己丑朝日に崩ぜとも又一説に天王
の時山科へ葬奉り御陵すなわち天王の御陵と云ふ
山科より山陵の御陵と山廟野と云ふ十陵の第一に又
田原天皇とも近江帝とも申なり

○てんちのうたうのうたとよむべし

▲此歌。後撰集秋の部に載せられ。此歌の意。一説は秋の田の
とよめるに。秋の田の中の仮屋。一説は仮屋の
なわ。うの屋のいかなる。一説は秋の田の中の仮屋のこと
もしくはとよめり。秋の田の中の仮屋のこと
しるべし。彩古今に

婦人の詞花集に田家月　彩院御製

月きよみ里にあるるかりのやどりにて
見おろす仮なる屋とこそ結れ。仮屋と云ふ
はかりなるべし。わがやどとこそ
ながめ

なれば昔のうこはかりの御よろこびなり。殺生をもとどめ給ふ。殺生をもとどめ給ふ。
[illegible]
なるとなん。さて[illegible]帝は仁心ふかくましまして。民の困窮をあはれ給ふ。
[illegible]
の辛苦をとろとおぼしめし。帝のはぐくみ給ふ。民の困窮をあはれ給ふ。
[illegible]
[illegible]
[illegible]

おほひくしぶそれとも又ぬぎわつるげ。去すぎぬれば。あるもしらうんじ。山の陰めよりとどろろくの衣ほそとよいのくぶ。去い藍の衣よりかたくれしろ。ひよろかすこそぬぎろうやうなれば。どろろくの衣しろわかとい衣のあんよりのくし。素のろとともそいこ河辺。それば去ぬ。去ぬ。ことのいつも衣きにろろくしろわるもろる用よろろそ大田の河ろくこ。又わる説ろい。

素とかくしてろあろあん。去すぎ衣ろうもなんなわぬれば。四方山のかとろいろる五教じくとまろくしぬ。ひろくふいろるふなれいろわて。みる素のあの作ろし。絵れしろ。今日いろやや。首衣ろて。衣衣の附詞なれば。もろやや素のろろて。よいろれまし。人のろうも。衣衣ろいる白きひとくの衣ろろうゆろわなれば。ひろくふもろあいろろくの衣かとろいろいべきこのかとろわろく。五教の説いは。素の五教。してこの説白よろゆろと。素の素のあんとめそ。ゆろくの衣ろくし又或人の説いは。美人は素のろなれども。今日い素の衣もろろくの衣ひとくふ。又わる説ろ云衣の素ねひとろよろろろ山へ。ふ。説ろ云衣の素。首衣ろの素とろろわ。ろれいは。才三四句ろわ。紀いろ。素のろゆろ素。なわといろわ。ろ。ろ。ろ。又一説ろ云わまのかろふい。首神代ろ。天照大神。岩戸よりこりやとなりひ。附心百ろろ附。天ろ下。白ろなわりとろけそろくのとろろくのとろわろ云。

新勅　冬ろそ去いろろ。ろ。白ろ云かろろ山ろかとろろひく

新古今　おのくしろ去ろそ去にろそろ。ろ。わまのろ山かすろろひく

人ね門ろろふ。ぬせろ。ろのれろ人。ろ。ろ。ろ

山部赤人　父祖不詳。神亀天平之比の人也。或説聖武の時の人也。又人丸と同時の人也。山部は姓氏所の名。古今の序にこのごの赤人と云人あり。あにわやしく

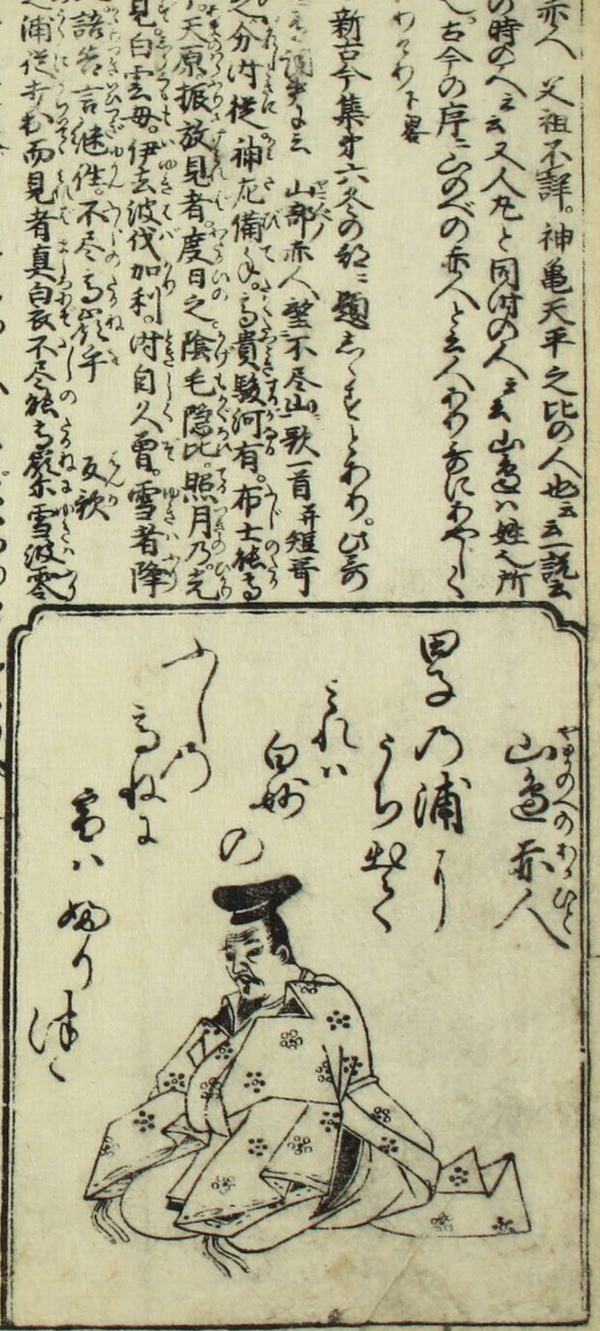
▲此歌新古今集第六冬の部に題しらずとあり。此歌万葉にこれを載せり。

山部赤人望不尽山歌一首并短哥

天地の分れし時神代備くゆきてしるき貴駿河有布士の嶺を天原振放見者度日の陰毛隠比照月乃光も不見白雲母伊去波伐加利時自久雪者降家流諸谷言徳佐不尽乎　反歌

田子の浦ゆ出て見れば真白衣不尽の嶺に雪は降ける

家流流は山部氏まいりとあり。



右傳云官姓氏代等不知之云々或系図曰用明天皇聖徳太子山背大兄王弓削王猿丸大夫是也

▲此哥古今集秋上に見えたり。

奥山に
もみぢ
ふみわけ
なく鹿の
こえきくごとに
秋はかなしき

天平元年己巳生安丸孫猿人子云大伴宿禰安麿大納言贈従三位大伴宿禰旅人家持大納言従二位八雲抄曰万葉の作者多くれども家持人丸赤人なども棟梁せり

▲此の新古今集才六冬紀にあり。家持集まれば夫に多くあり。ひさかたの雁は七夕交会よ。鳥鵲為橋ぞ云うわたて出るり。彦星は天河よ鳥鵲の橋となりと云ふ如き天河とひさかたの月と云つて。これとあくまで七夕交会の歌は橋ぞ。唯天河ばかり彦星いくで天のすんと知るべ。元亨釈書に云ふ家氣と家と云なりて我の紀をらひらうの家氣と家と云なりて我の紀をらひどもいつふも家氣天ひらうと天ひらうとて。天ひらうと紀ねうの玄有ばかりの白ひの代公は家満天と云ふ事なり。家持の園歌よ起出でく。月もなくさうる天よ向て。此〜出るあし。家の天よみしらるとて。眺ぶばかりあり〜家の家のみしらるとあるとて。彦星の家天さあり〜家のみしらるとあるとていし代義は行くとも云家紙云みふくく月もなくもしらるる夜。家は天よ人くくく〜くるる。水夜なども起おくぶ。とともつて餘情ありあるべしとも

中納言家持

鶴の わたる河原

ちよ

と 家の

ちろ紀と

れて

夜 夫よ

中務太夫舟守ノ子也元明天皇和銅元年生元正天皇霊亀二年八月ニ遣唐使大伴山守ニ同船シテ十六才ニテ入唐セリ。サテ唐ニテモノヽナビシテ才智高クナリテ姓名ヲ改朝衡ト云リ。唐帝其才ヲ愛シテ官ヲスヽメテ秘書監ニイタリ。カサテ検校ニウツリ。左補闕ヲヘタリ。カクテ年久シクアリテ日本ニカヘリケルニ聖武天皇ノ天平勝宝五年ニ又遣唐太使ノ三ツトノリシウケタヽワリ再唐ニヲモムケリ。是唐ノ玄宗ノ天宝二年ニ栄雅ノ古今ノ説ニ仲丸ハ唐ノ大暦五年ニ卒ス。日本光仁天皇宝亀元年ニアタレリ。時七十九才ニ云績日本紀卅五日光仁天皇宝亀十年五月丙寅前学生阿倍仲麻呂在唐而亡家中備之葬礼有勅勅賜東絶一百匹白綿三百屯是栄雅ノ説ニ十年ノカワリアリ

人の家まろ

安倍仲麿

あまの原

ふりさけ

みれば

春日なる

三笠の山に

出し月かも

此外古今集羇旅部よあり。何云よ云ふ云ふ云ふ

云ふ所の海を云うて、のおの人ひまのこゝろひけーク。なるて月のいと新しく
ゝろとゝとしよみうとゝ云ふ所を云てびゆゑ
なぐり餅あの時作りし時 こゝろ方くし大仏日記に云ふ昔安倍仲丸と云ふ人ハ唐土
わたりてゝ人わきあり何よ。和よ歌をおもてゝ。その唐の人ひまのこゝろひけーおもてゝ
このゝうゝこと作ることをしるゝ。わすやわりゝん
仲丸のあ。わゝ。ハゝ。ハゝ。ハゝ。ハゝ。今ハ上古の人もゝゝ
ゝゝとひもわゝゝゝしもわゝ何ハゝひてゝ

わゝゝゝ

小野小町出羽郡司小野當澄女帝澄ヲ或説ニ出羽郡
司小野良實女又三条院位時説當澄女ニ仁明時承和比
今古集才二ヲ云ヒ此わり小町家集ニハ同ジ義
と添てこれあり其旨曰ふるい義哉の説あり
義のさ義さこハ御のみとをさんとをひしーよ世ますハ
るをけくてとやうことまされてこーろ義ゝ
しだうわよゝわをゝ寄ーてゝ裏の説ハ身のお
ゝ人もられしゝろさり地ゝ義のかゝろへをそゝ
身もくゝうわてゝそあゝとゝいるゝくゝ
貞観ゝ小町家集ゝ義とをゝわてゝあれだゝいやり
ゝろゝ云説ゝわゝ此義よりひてゝあゝ可ゝ
此ゝ説ゝよゝ義とをゝへて可ゝ
云ゝわのつゝゝしゝのゝゝ已ゝれゝゝゝゝゝゝゝ
徒の字ゝ字涯ゝ徒ハ空也とゝあれだゝひのーゝ
義句の説ハ哀の義ゝーて。也義ゝ稱ゝ
徒ゝ世ゝゝゝ徒ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝと義ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

参議篁　姓小野　参議左大弁　号野相公

敏達天皇　春日皇子　妹孝毛人

毛野　永見　峯守

敬法　道風

篁　保衡

好古

篁ハ破軍星の化身し

官ハ文章生　弾正少忠大内記　蔵人式部丞

右字少貳　春宮学士　弾正少弼　義仙寺

篁この古今集歌　旅に何ちよ　おきの島

へ　なりの人のりて　はこぶ　ふ　ふ　ふ

野篁配流す。仁明天皇　承和五年　遣唐使に

任ずるの人のなどハわるきものとして流され

ることゝ。水漬之系　承和五年十二月ハ小野篁を

のおへ　つ　つ　つ　つ　唐へ　ら　ん　ら　ら

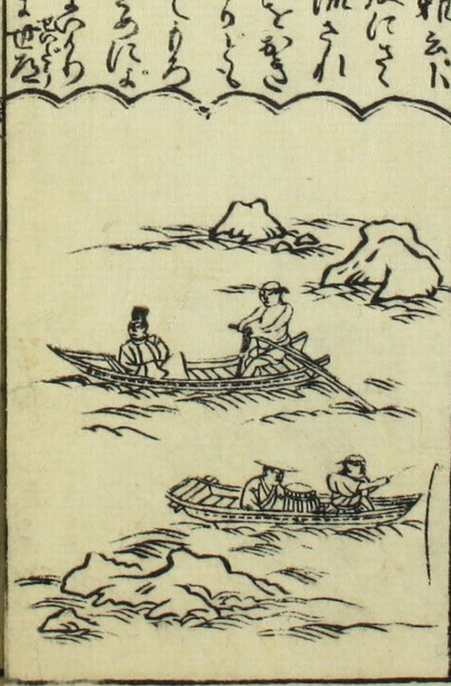
身に病ありて　年　よて　ら　ら　ら　ら　ら　ら

う　へ　つ　ら　ら　文の　の　つ　ふ　ひ　ら　れ　て　世　の　ら

う　ぬ　る　こ　と　云　ら　ど　ら　の　ら　ら　ら　ら　ら　ら

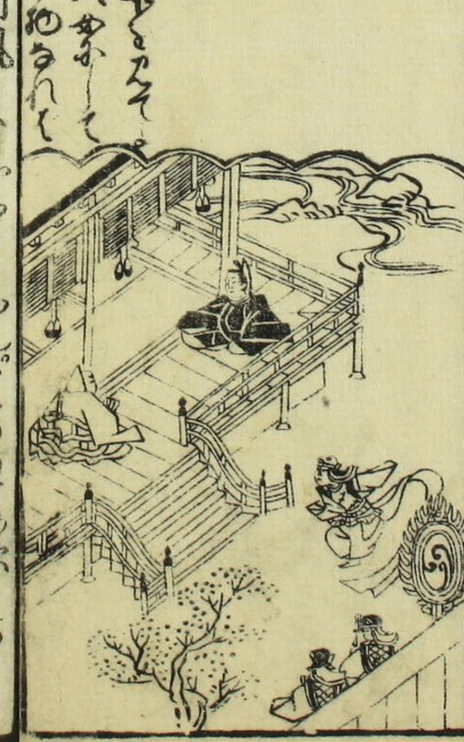
ひ　て　流　つ　ら　せ　ら　ひ　し　な　り

篁　丞　丞　肯　の　称　ま　世　ら



流しゝ人のゝ　ゝ　ゝ　

僧正遍昭　俗名良峯宗貞号花山僧正又号良僧正　釈遍昭門下侍郎安世ノ男也早ク出家ス嘉祥三年三月上帝崩ノ日髪ヲ剃テ元亨釈書詳也太和物語ニモ此趣ク嵯峨ノ天皇ノ后ニ浮名ヲ立ケル故ニ出家ストヲ云説非ナルカ寛平二年正月十九日滅七十六才



陽成院　諱ハ貞明清和天皇才一ノ子ニ母后ハ
皇太后藤原高子号二貞観十年十二月十六日
降誕。天暦三年九月九日崩在位八年（八年八十一歳）
世帝ヲ二条院ト号スルハ院ニナリ玉ヒテ此院ニ坐ス

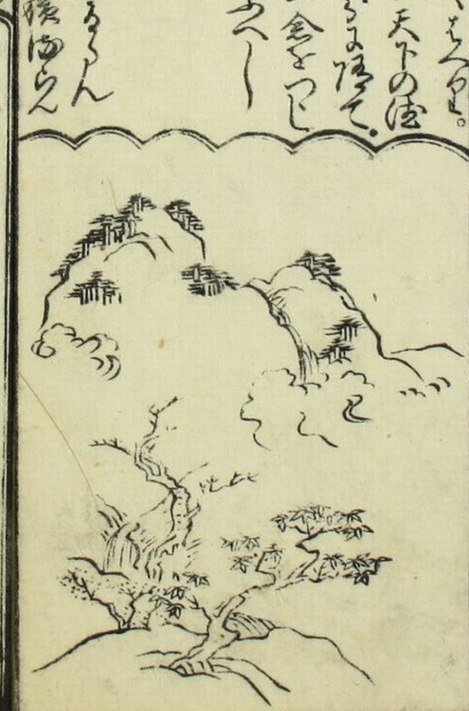
▲後撰集十一恋三。河内よりつかはしける　左大臣

ふるとはあり。云旨ニ付くだ山又この川皆吉野の
名所。この公ハ初めふかひ初しものなれば。
ひとなるるとあの子すがなるべつとく。衛と
なるふさとへ。ふるし。山川の赤ハ橋川へ流るゝ。
つくるとはあまの砂のトをとづるく。河とも見てくだ。
一滴で流れてすぐハ河となれてとすべて序言
ちうこの公ハ大略ふるし。春の山ちうく。公面白くもくるる。
天子の位ハ万ものもの。ぶ〜めもるものハ。若ハ天下の法
ちうわ。恋い天下のうち〜てとなれて。なるこの人ちうの法で
山如ハ川ハ〜〜ちくひ。若ハ夏よ分て。元初の一金をつし
まぐれ〜ハ〜〜ちくの源なるうをとるるしうく時ちへ〜

眠江初鷺觸　入楚則無底
千里始足下　高山起一塵　白樂天

▲古今集十四恋四。みてれんとあるれなるあるよ
とあわ。この歌ハ歌ハ中ハ頭昭。この
ハ歌ハ陸奥の信夫郡よりいづるとて乱れ
ものとする。陸奥信夫郡ハ乱れ
の名所つけてよめるとて。この歌ハ
云まのものとてこの歌ハ乱れハ
としわぬ乱れる紋つくしの名所。昔ハ
ものとそ。さて乱ハ上二句ハ乱れ
乱れ。乱れてもなく乱れ。乱れ
乱れ。伊勢物語。
乱れ。乱れ。
乱れ。乱れ。
乱れ。乱れ。

源融　嵯峨オ十二源氏母正四位下大原金子於
六条河原院ニ換ニ塩竈浦ヲ
嵯峨天皇―仁明天皇
源融　左大臣従一位号河原院



光孝天皇　諱ハ時康　号小松帝
仁明第三の子也母ハ藤原沢子。贈太政大臣総継女　在位三年
仁明天皇　文徳天皇　田村帝

宗康親王
光孝天皇

天長七年庚戌降誕。仁和三年八月廿六日崩御　五十八才　九月三日葬小松山陵。
甚和歌を好給ひ　改元ありて世人皆和歌にこころをつくしたりとぞ

▲古今集第一春上。詞書よ。仁和のみかどとまうしけるころ。仁和のみかどとは。光孝天皇のおはしましける。寛平御時のきさいの宮の歌合。

きさいの宮とは。藤原の高子。寛平御時とは。宇多天皇の御代。

春日野の若菜。春の野に出て若菜つむ。我が衣に雪は降りける。

春日野は。奈良の都の東。若菜は。春の野に生ずる。食用の草。

春の野に出て若菜つむ。我が衣に雪は降りける。

春の野に出て若菜つむ。我が衣に雪は降りける。

春の野に出て若菜つむ。我が衣に雪は降りける

行平　在原氏号ニ納言
桓武天皇――平城天皇――阿保親王
大江音人
在原行平　中納言従二位民部卿左兵衛督　仁和三年致仕配流
在原守平
在原業平
在原仲平

▲古今集才八雜部に歌不知とあり。行平国儀の守なりし程に、海人に塩焼くけぶりの立ちのぼりたるを、つくづくと見て、又ハ、れそとつくづくと見て、詠れし歌の流を流別の稲葉山と、それハ国儀の国司のまつりごとを、人心をなぐさめ、松をあるかなれとなりしと、ゆゑ、しかるべし。山あり、せんさくさのこいつくさるるなれば、唯八雲流抄又花垂の流のごとく流別の稲葉山と、なをそれ、この歌ハ、ものがたりの、なかに、ものがたりの、ことに、ものがたりの、ことに、ものがたりの、こと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

伊勢　前太和守従五位上。藤原継蔭女。継蔭元伊勢守故為女之名

内麿　右大臣　真夏　目野家元祖

濱雄　従五位下民ア少輔　家宗　三木家祖

良雄　治ア少輔号東山進士

継蔭　大和伊勢守　女子伊勢

伊勢物語作者。寛平法皇三毛近ク宮仕シテ行明親王ト生リ。源氏。大和物語ニイヒゾコト云ヘリ女ロト云心ヒトシ

▲新古今集才十一恋五の一首ちくさ　とわりぞ　ぬれぬ袖　もいとはじ　ものとこそ　ぬるとこそ　ぬるとこそ　ぬる

俗名玄利又八儀時ニ云長門ニ遁昭之下ニ遁昭ノモトヘ行タレハ法師子ハ法師コフヨケレトテ法師ニシモフヨシ大和物語ニアリ

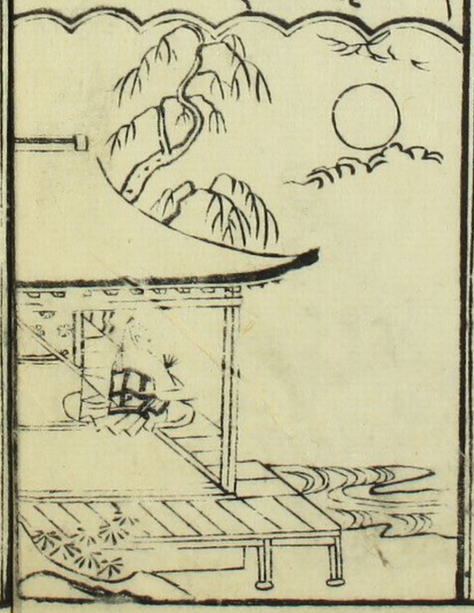
▲古今集才十四哀ヲ四ヨ。鈴ヲ〻をとあり。空の月をまち出る山一夜の秋よりあくをつゝ今ヤ〻ヲ出るよりあり。公ハ秋の初ちぎりあり玉ふく。と秋もやく〻ゝ空の月を遠うもりよ御秋の中ゝもをぎ名ゝ月よさへなわらくあゝ月も玉の光なわれもらぎわ〻人ハ秋ちぎ〻てゝ有ぬの月をまち出るうくたへとく出べき

俳諧西極〻ろ奇し

みゝ月のわれ〻く年〻〻西うけの玉の玉の玉のまくよ成にて

ろ〻ゝ　ありぬの月ありうゝ月ひ〻ゝ月ひ〻ゝ月の出ぬ〻ゝ月ねい　今うんとひ〻ゝ月命ゝ

まろよけぬへ〻ゝ月くまの月



先祖不見字文琳縫殿助宗于男ニ云古傳云陽成院ハ御人ニ云或中納言朝康子ニ云

▲古今集秋下巻以ヨ之貞のみこの家の歌合のとき。康秀ノ家集ニ公野の草木ニ云。昔ハ嵐を秋ヨ用ろくれを切論とちくのゝの草木とちくちゝ。さるを男之程ほとちく秋の草木と色をてみち。嵐ハ忘ハ山ゝハ宜の字ニ云ハ山ゝ云ハ山ゝ。ハ山ゝ云ハ山ゝ云ハ山ゝ云

伊豫守正五位下成忠従五位下内蔵頭光

平城天皇―阿保親王―
大江音人―千古
在原業平―千里 立男

▲古今集秋上。詞云。是貞の親王の家の歌合のうた。云音曰日ハ陽の気なれハしるふよりの和もろく月ハ陰の気なれハうち添るもなをもミわけもすひめしされハちゝのはゝそのもゝしきの内 久しとも云ハ千文しるのくらゝしゝつゝも月ハ陰ハ下の句ハ秋ハ天下一万民の秋ハ天ハ万民の秋ハ月ハ一身の秋ハ

いろ〳〵と秋ハ一のの秋ハ八わくねどいろ〳〵

燕子楼中霜月夜　秋来只為一人長
大底四時心惣苦　就中腸断是秋天

菅丞相西府三月九月十三夜ノ詩ノ結句

随見随聞皆悽慘　此秋独作我身秋

月ハそもちゝくゝろ心ハ一のむ〳〵ねを〳〵もちゝくゝろ月ハ涙のくもはらん

菅家　右大臣　正三位右大臣　従太政大臣正一位
天照大神才二子ノ御子土師連ホ祖天穂日命十四世孫野見宿禰孫仁徳天皇ノ世ニ賜土師臣姓　一世孫身臣仁徳天皇ノ世ニ賜土師連姓十一世孫古人ホ天平元年六月九日ニ賜菅原姓

天穂日命―宇迦―古人
清公―是善―菅家

今の世の天神ハ巨儒にして詩文ハ達し。ちゝ和のよもゝ〳〵ハ元慶六年渤海の使者来ル。詩儒ハ文章ハ使者右大臣の詩を称して風雅白楽天ハ似ルと。ひろ〳〵ハ和歌集ハ菅丞相ハ

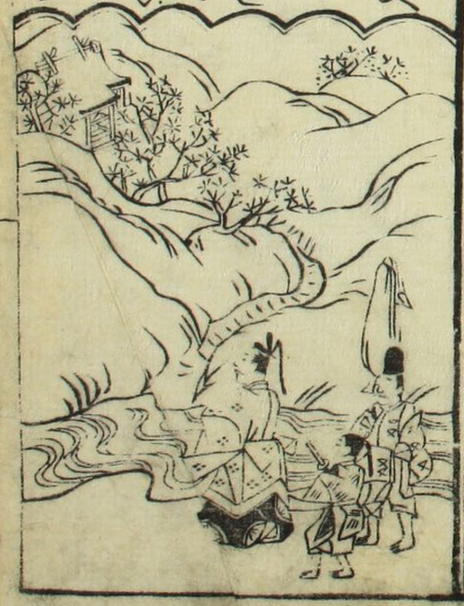
久しくこの月のうつもはるかの家の風ハ

▲古今集羇旅ハ。初出ハ朱雀院なりしかハ

ゆくすゑ

の世ハ官名ハ

の世ハ



江山のまこふとゝ云ふ山ハ山ゝ山ハ山ゝとりわけ仏を体なるまいりうれバぬきもとりわけぬくされを
山山のおゝのおゝきをさるゝ神よりも白なるゝ白のうゝわるゝぐるゝそれ神を
伝とうけのゝなれバたゝをぎりよ帯帛をたゝきをこんゝわも山のおゝをゝをのきゝも
向るゝさゝ〜のゝゝハれうけおゝ〜ゝとゝどうゝあゝをゝ白をゝきゝわゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
白ゝとのゝひゝけゝまハゝゝ
ゝゝちゝとゝ花をゝもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

二冊ノ内

青木氏